

相互講評で レベルアップ



自分のことは自分が一番わかっている…。本当にそうでしょうか。性格、体調、クセなど、わかっているようで細かいところまできちんとわかっていないのが自分です。それは、演奏に関しても同じこと。自分たちの良いところや改善すべきところが客観的にわかれば、個人としてもバンドとしてもさらに向上していきます。身近な理解者がいる部活動はお互いに演奏をチェックし合えるまたとない絶好の環境です。ぜひ演奏を見せ合って講評し合う機会を作りましょう！



客観的なチェックが大事

個人練習にしてもバンド練習にしても、演奏している自分（あるいは自分たち）が本当は一番その良し悪しが見えていない場合があります。自分たちの演奏を客観的に判断する最も簡単な方法は演奏を録音・録画してみることですが、意外と聴き返してもミスばかりが気になって的確な改善点や伸ばすべき良いところに気づけないことも多いものです。

また、今の時代個人練習の方法はインターネットやSNSで見つけることができるかもしれませんが、合奏に関して、さらにいえば今ここで演奏した自分たちの状態に対して適切なアドバイスがもらえることはありません。

軽音楽部という環境で、客観的なチェックを行ってくれるのはコーチ（指導員）です。学校によっては顧問の先生も良いアドバイザーになってくれるかもしれません。しかし、そういった指導者がいない学校では、大会やクリニックなどに参加して外部の人から講評をもらうしかありません。とはいえ、そういった機会は少ないため、部員全員がレベルアップできる施策が必要となります。

お互いに講評し合うメリット

どんな軽音楽部でもできる最も有効な演奏のチェック方法は、部員どうし互いに講評したりアドバイスし合うことです。初めは先輩が後輩に…という形だけでも良いでしょう。とにかく、互いの演奏を見せ合って意見交換する、感想を言い合う機会を作ることに大きなメリットがあります。

誰かの演奏を講評したりアドバイスすることは、自分のやっていることを見つめ直すきっかけになります。それに、そもそも先輩が後輩にアドバイスしてあげることは部活動の基本です。一方、後輩が先輩の良いプレイを講評しようと一生懸命に観察することも、その後の成長につながります。

どちらにしても、他人への講評が自分の耳を鍛え知識を増やしていくことになるのです。専門的なことがわからないという人も、少なくとも自分のパートのことは互いに意見したり質問し合うことができるのではないのでしょうか。

講評のポイント

講評のためにチェックすべきことは、初心者バンドでも上級生のハイレベルバンドでも実はあまり変わりません。技術的な講評を無理にする必要はなく、バンド演奏に対しての向き合い方やアンサンブル上の役割が、それぞれのパートとしてきちんと行えているかがメインです。

そして、部活動としての規範は守られているかも大事なポイントです。演奏に臨む姿勢や態度、準備にかかる時間、セッティングや楽器＆機材の扱い方、挨拶、部員どうし感謝とリスペクトがあるか…など、軽音楽部という部活動として、また集団行動としての責任感などを互いにチェックするだけでもその意味は十分にあります。

それでも、言いにくい、気兼ねしちゃうという意見が多いのであれば、無記名で講評用紙を書いて発表するといった方法もあります。ぜひ取り入れてみてください！

歌うことと表現すること

ボーカリストの主なチェックポイント

- ・発声や滑舌がしっかりして歌詞が聴きやすいか
- ・音の強弱や歌い方は楽曲に合っているか
- ・他のパートとリズムやテンポ感が合っているか
- ・ピッチは正確か
- ・歌詞の世界観をイメージできているか
- ・自分らしさが出ているか
- ・マイクの使い方は正しいか
- ・ステージングや表情は楽曲と合っているか …など。



ボーカル

ボーカルも楽器だと意識しよう

ボーカルのチェック項目の第一は「歌うこと」です。体が楽器であるボーカルは、歌うことを体のコントロールで行っています。それは「発声」「ピッチコントロール」「アーティキュレーション」「マイクの使い方」に大別されます。

発声でよくチェックされる、伸びやかなロングトーンや低音高音の響き方などは、腹式呼吸や鼻腔共鳴などを使った専門的な部分です。これらは地道な練習と経験が必要なのでじっくりと取り組んで欲しい項目ですが、意識すればすぐに改善されていくものもあります。それは「滑舌」です。ボーカリストは歌詞を言葉で伝える大きな役割があります。発音、口の使い方などを歌詞が聴こえやすいかをポイントにチェックするだけでも大きな変化が表れます。

ピッチとは音程のことです。歌も音楽なのでしっかりとした音高（音の高低）、音程（2つの音の距離）の正確さが求

められます。音高を判断する耳、意図した音程を出す口腔の使い方、伴奏とのマッチングなど、普段からの練習の成果が問われる部分でもあります。

アーティキュレーションとは、アクセント、スタッカート、スラー、ビブラートといった音の表情の付け方のことです。習得にはやはり時間がかかりますが、音価と伸ばした音の処理を常に考えていることが大事です。音価とは音符の長さのことです。この音はどこまで伸ばすのか、伸ばすのであればどんなビブラートをかけるのか、あるいはかけないのか、短く切るのかは16分音符なのかピチカートのようにはじくような歌い方なのか…。歌うということに楽器陣と同じ意識があるかがポイントです。

ボーカリストが使うダイナミックマイクは指向性が狭く、扱い方に一定のテクニックが必要です。口とマイクの距離、口に対しての向きは最低限の項目です。

「自分らしく」を意識しよう

ボーカリストにとって大事なことは「自分らしさ」です。オリジナリティや個性というと大袈裟に聞こえるかもしれませんが、例えば、既存曲をコピーする時にその歌い方まで完コピする必要はありません。原曲の歌手がどんな気持ちでメロディや歌詞を紡いでいるのか、どんなテクニックが駆使されているのかなどを探究しながら、最終的には自分の「声」と「言葉」と「感情」で歌えることが目標です。

オリジナル曲の場合は、コピー元がないので自由に表現す

ることができます。しかし、すべてを1から作り上げなければならないので楽なわけではありません。普段からコピーをたくさんして、歌唱や表現の引き出しを多くしておくことが大事です。どちらにしても、バンドで歌う場合は自分1人で表現しようとしなくて、メンバー全員で楽曲のイメージを共有し具現化しようとしているかが最も大切です。

そして、ステージではフロントマンとしての振る舞いや表情も必要不可欠な要素です。楽曲に合った「自分」のパフォーマンスを目指しましょう。

▶バンドとのリズムもチェック！



ポピュラーミュージックにはバンド全体の「リズム（グルーブ）」が欠かせません。上手に歌えても伴奏と合っていないければ良い表現になりません。自らも体でリズムを取りながら、バンドが出すグルーブに乗れていることが大事です。テンポ、ビート感、タイム感を含めたリズムの共有も重要ポイントです。

場面ごとの役割を果たす

ギタリストの主なチェックポイント

- ・音量、音色は楽曲や演奏に対して適切か
- ・リズムに乗れて、ドラム、ベースと合っているか
- ・歌のバックング時とソロなどの主役時の切り替えはできているか
- ・他の楽器とのマッチングを考えた音作りか
- ・機材のセッティングはスムーズだったか
- ・ソロなどのステージングは考えられていたか
- ・ギター演奏のテクニックは高いか
- ・チューニングは正確だったか …など。



楽曲の理解 & 協調性を意識しよう

ギタリストの担う役割は楽曲によって変わります。ロックテイストなアレンジであればギターの存在感が見せどころです。歌が中心のポップスでは和音をキーボードとともに奏でて世界を作ります。また、ファンキーなタイプの楽曲では小気味良いカッティングがグルーブにとって重要だったり、場合によってはアコースティックギターが求められるかもしれません。さらには、どんなタイプの楽曲でもテーマメロディやソロなどを演奏することもあるでしょう。

そんな変幻自在なギターのチェック項目は、ズバリ「協調性」です。楽曲がどんなタイプだとしても、ギター演奏の大部分はバックングです。ドラムとベースのリズムを補強し、コード進行や歌のメロディが聴きやすい伴奏など、耳に入るけど邪魔しないプレイかどうかが最大のポイントです。そういった意味では楽曲のリズムや歌詞のイメージを最も理解しているべきなのがギターパートかもしれません。

まずはリズムです。ギターだけでもリズムカルなストロークやカッティングであることが理想ですが、ドラムとの相性も重要です。特にハイハットの

出すリズムとのマッチングは大事です。また、アクセントや音価をきちんと演奏できていることもリズムの良さにつながります。

次にパワーコード、ローコード、バレーコード、アルペジオ問わず、しっかりと和音が聴こえていることです。弦を押さえる手とピッキングのタイミング、弾く強さ、コード移動のスムーズさなど、普段の練習が大切なことばかりです。

そして、ソロなどの単音弾きをする時の音楽性も重要です。単なるフレット移動ではなく、音楽的に歌うような演奏ができているとアンサンブルとし

で一気にまとまりが出ます。「ギターを弾く＝音楽を奏る」になっていることがポイントです。

サウンドメイクを意識しよう

エレキギターは楽器単体では音が出ません。アンプにつなぎ、エフェクターなどで音作りをすることが必須です。そのためには楽器や機材、電気、周波数などについての知識や経験が必要です。

こだわればいくらでもこだわる音作りですが、まずは楽曲に合った、他パートとの合奏に馴染む音作りができているかが重要です。普段から既存曲のギターや先輩がどんな音作りをしているのかを探究し、実際にバンドで演奏した時の良し悪しが判断できるようになることが目標です。

楽曲の中でいくつかの音色を使うのであれば、その変化の差も重要です。それぞれの音色はもちろん、音量は適切なのか、そしてその切り替えのタイ

ミングは良かったか…。特に、ソロやテーマメロディはギタリストが主役になる場所です。サウンドメイクとともに、ステージングや表情など、どう客席に見せる（魅せる）のかといった表現力もプレイの一環です。

機材が多くなるとセッティングに時間がかかります。事前の準備、スムーズなセッティングも大事なチェック項目です。

▶コード楽器どうしもチェック！



バンドに2人以上ギタリストがいたりキーボードがいる場合、フレーズや音色音量の振り分けは重要です。しっかりと押し引きを考えながらバンド練習しないと飽和してしまいます。ギターどうし、キーボードとの話し合いがよくされていること、そしてそれらがバンドの音に馴染んでいることが大切です。

接着剤、潤滑剤 になるプレイ

ベーシストの主なチェックポイント

- ・ベースらしく、バンドに馴染む音作りか
- ・ドラムとの相性は良く、単独でも良いグルーブか
- ・ベースラインの作り方や理解は良いか
- ・コードの和音構成や楽曲の調性は理解できているか
- ・アンサンブルやボーカルを活かすプレイだったか
- ・機材のセッティングはスムーズだったか
- ・ベース演奏のテクニックは高いか
- ・チューニングは正確か …など。



合奏の要であることを意識しよう

一見地味に見えるベースは、実は合奏の要としてとても重要なパートです。ポイントを大きく分けると「リズム」「音作り」がバンドに馴染んでいるかどうかになります。この「馴染んでいる」というところが大事で、単に他パートの邪魔をしていないかという意味ではなく、例えばドラムとギターのリズムや音作りの補強、ボーカルメロディやその他メインとなるフレーズの下支え、バンドサウンド全体の低音による安定…などが挙げられます。

打楽器であるドラムが出す合奏の土

台となるリズムは、基本的には音価がない打点の強調ともいえます。そこに音価のあるベースがギターやキーボード、ボーカルといった上物パートが乗りやすいように補強します。しかし、ドラムに合わせすぎ、上物に合わせすぎになってしまうと、逆にアンサンブルはまとまりません。ベースだけでもしっかりとグルーブしていることが理想です。人に合わせながら自立している…それがベースパートの最も難しく評価の良し悪しが出る部分です。

そういった接着剤的な役割は音作りにもいえます。上物パートの演奏する和音をオクターブ下のどっしりとした

低音で支えながら、他の楽器と周波数帯域がかぶらない音色作りかどうかは大事なチェック項目です。ベースサウンドは、バンドサウンド全体の安定につながります。

ベースの音作りは、楽器本体、アンプ、エフェクターで行いますが、ギターほど音作りを意識しなくても演奏できてしまうことが落とし穴です。低音で安定させながら輪郭のはっきりした音作りは、弦をはじく手の影響、コンプレッサーやEQ（イコライザー）などについての知識の有無にも関係します。また、ソロなどでは目立つ音色や音量が求められる場合もあります。合奏に

対する意識が高いことが理想です。

フレージングの大事さを意識しよう

ベースラインは、楽曲全体のアレンジにとって重要です。ジャンルによっては単にルートを弾くことが適切な場合もありますが、ボーカルのカウンターメロディやオブリガートとして、コード進行をスムーズに聴かせる潤滑剤としてのフレージングなども、ベースと

いうパートの大きな役割であり大切なポイントです。

オリジナル曲ではフレージングの創作もチェック項目となりますが、既存曲のコピーの場合でも、そのフレーズの意味や効果が理解できているかどうかは全体のアレンジや演奏に大きな影響をもたらします。考えようによっては、ベースラインはメロディであると思えることもでき、音価やアーティキュレーションを常に意識しているプレイ

が目標です。したがって、フレーズ作りにおいてもコピーにおいても、ある程度の音楽理論の理解が必要だといえます。

また、ベースソロやピックアップフレーズなどでは主役としての主張も大事です。ベースのチェック項目は意外と多く、どのパートよりも音楽的にクレバーであるべきだといえます。

▶立ち姿、弾きっぷりもチェック！



ステージの立ち位置的にも難しいのがベースパートです。ボーカルやギター、キーボードのようにリードフレーズを演奏することが少なく、ドラムのように派手ではないベースはステージ上でもこじんまりしてしまいがちです。しかし、だからこそベーシストのステージングや弾きっぷりが重要となります。

派手さより バンドを支える力

ドラマーの主なチェックポイント

- ・テンポが一定に保たれているか
- ・アレンジに合ったダイナミクスを考えているか
- ・楽曲に合ったグルーブを出しているか
- ・ドラム演奏のテクニックは高いか
- ・楽曲に合ったサウンド（主にスネア）を出しているか
- ・リズムパターンとフィルインのバランスは良いか
- ・合奏の土台となっている意識はあるか
- ・セッティングは迅速に行われたか …など。



ドラム

合奏の土台なことを意識しよう

バンドの中でのドラムの主な役割は「テンポ・リズム」と「ダイナミクス」の提供です。バンド演奏の土台となるドラムは、いかにボーカリストや他の楽器パートが演奏しやすいプレイを心がけているか、楽曲の表現を気持ち良いリズムや効果的なフィルインでメンバーを先導しているか…など、しっかりと役割が理解できているかがチェック項目です。

テンポに関しては、なるべく一定のテンポで演奏し、他のパートの演奏の妨げにならないようにすること、そして、そもそも楽曲に合ったテンポで演

奏できているかが大きなポイントです。ドラマーのカウントから楽曲が始まる場合は当然ですが、他のパートから始まる場合でもテンポに関してはドラマーが責任を持つくらいの気持ちでいた方が良いでしょう。また、ドラムはリズムの発信源でもあります。バンドのグルーブはドラムだけで作るものではありませんが、まずドラマーが自信を持って良いリズムを出すことが先決です。

ダイナミクスとは、大雑把に言えば全体の音量変化です。打楽器であるドラムは音の強弱の幅が大きいので、他のパートはドラムの音量レベルに合わせていきます。常にバランスを考え

て楽曲をドラマチックに演出するようなダイナミクスのつけ方ができているかは、合奏の土台であるドラムにとってとても大切な役割です。しかし、自分勝手な音量変化は他の楽器や歌とのマッチングが悪くなる可能性もあります。ダイナミクスがバンドできちんと表現されている演奏は、ドラマーを中心によく話し合いがなされていた証拠でもあります。

フィルインも同様に、どんなフレーズなのかだけではなく、どんな感情で何のために演奏しているのかまで伝えるようなプレイが理想です。そういった意味ではフィルインの音量にも注意が必要です。

チューニングを意識しよう

普段の練習や大会において、ドラムセットは基本的に備品として使い回すことがほとんどです。楽曲やバンドのカラー、自分の好みに合ったチューニングや音作りをしている時間はありません。しかし、だからといって何もしないのは良くありません。

特にスネアドラムは、周波数帯域的にはボーカル、ギターやピアノのバックキングと同じ中音域の楽器です。スネアの音は最も耳に届き、楽曲全体のイメージをも左右します。少なくともスネアのサウンドメイクはしておきたいところです。しかし、使い回しのスネアではやはりそんな時間がありません。自分専用のスネアを用意して本番前に調整、チューニングしておくことが最

も良い解決法です。マイスネアを持参することがベストですが、部の備品をドラマーで割り振っても良いでしょう。

ドラムは生楽器なので、「鳴る」演奏ができるようになるにはかなりの経験が必要です。それでも、ドラムが出している音も「楽器の音」「音楽の一部」と意識してプレイしているかどうかは、ドラマーの大きなチェック項目です。

▶セッティング機材もチェック！



ドラムが楽しくなってくると、派手なテクニックを披露したりエフェクトシンバルなどを使いたくなります。必ずしも悪いわけではありませんが、本番の演奏に本当にそれらが必要でしょうか。目立ちたいだけのプレイは全体を乱す可能性も高くなり、セッティングに時間がかかるので機材の取捨選択も重要です。

楽曲の世界観 を彩るプレイ

キーボーディストの主なチェックポイント

- ・バックングのリズムはドラムに乗れているか
- ・ボーカルをよく聴いて感情表現されているか
- ・音色、音量などのサウンドメイクは楽曲に合っているか
- ・音色チェンジはスムーズか
- ・演奏のための事前「仕込み」は十分だったか
- ・セクションごとの役割をきちんと把握できていたか
- ・機材のセッティングはスムーズだったか
- ・キーボード演奏のテクニックは高いか …など。



キーボード

楽曲の一部なことを意識しよう

現代のポピュラーミュージックにはキーボードサウンドが欠かせません。ギターロックな楽曲やバンドもありますが、キーボードの必要性はどんどん高まっています。それは、ピアノなどでのバックングからシンセサイザーによる装飾まで幅広く活躍する場面があるからです。キーボードのチェック項目もその辺りがメインです。

まずは、バックングプレイです。主にアコースティックピアノやエレクトリックピアノの音色での演奏になると思いますが、初心者よりもむしろピア

ノを習っていたことがある人の方が注意が必要です。バンドでの演奏は間違えずにきちんと弾けたかどうかだけが判断の基準ではありません。ボーカルに寄り添った強弱やアーティキュレーション、ドラムやベースが出すリズムに乗る、他パートとの相性が良い音作り…といったアンサンブル性が大切です。

その他のストリングス、ブラス、オルガン、パッド系などの音色はシンセサイザーで演奏することも多いと思います。コピーする楽曲によってはたくさんの音（フレーズ）が入っていて、とても1人では演奏できない場合もあ

ります。そんな時の実際に演奏するフレーズを選択するセンス、演奏に適した音作り、音色切り替えのタイミング…など、キーボードパートのチェック項目は意外とあります。それらが、ピアノなどのバックングと両方ある場合の処理などもポイントです。

また、バックングにおいても装飾フレーズにおいても、重要なのは「感情のこもったプレイ」です。近年の楽曲音源では強弱や弾き方で感情表現されることが少ないため平坦な演奏になってしまいがちです。バンドで演奏する場合はメンバー間で感情を共有した音楽的な表現が求められます。アーティ

キュレーションに気をつけて「音楽を奏でる」ことが大事です。

サウンドメイクを意識しよう

バンド演奏のキーボードの役割がわかればわかるほど、それぞれの音色作りの大事さに気づきます。キーボードには元々内蔵された音色があり、さらにそれらを加工できるエフェクターやEQも内蔵されています。自分たちの

演奏に合った音色作り、音量調整は事前準備として最も大切です。

また、楽曲やバンドによってはそれらをバンクに保存して音色切り替えが素早くできるようにセットしたり、セバレート機能を使って演奏手順を考えたりと、多くの「仕込み」が必要になる場合もあります。自分の好みの、そしてバンドの演奏に合うサウンドメイクとスイッチングなどを含めたプレイは、学校の備品を使って行うには限界

があります。マイキーボードを持っていることが理想ですが、「仕込み」にかかる時間や演奏時の微調整など、機材の知識があることが求められます。

キーボードパートはバックングや装飾フレーズだけではなく、テーマメロディやソロなどギター同様オールラウンダーなプレイが求められます。いつも全体を俯瞰で見ることができるとも必要です。

▶ 事前準備もチェック！



キーボーディストが一番懸念しなければならないのはセッティングです。マイキーボードでも備品であっても、素早く演奏できる状態にしなければいけません。キーボードスタンド、ケーブル、使うならペダル、イス、マイク、そして音色確認…。ハード的にもソフト的にも事前の準備がとても重要です。